

東南アジアにおける民族服の研究（第7報）

——北部タイ山地民族 カレン族の生活習俗と衣裳——

柴村 恵子・榊原 弥生

Studies on Folk Costumes of South-East Asia (VII)

The Living Custom and Costumes of the Karen Hill Tribes of Northern Thailand

Keiko SHIBAMURA and Yayoi SAKAKIBARA

緒 言

北部タイにはカレン族、メオ族をはじめ10余種の少数民族が住んでいる。彼らの多くは、中国西南部からベトナム、ラオスを経て移住してきた者、中国の雲南方面から北ビルマの山の背や、谷間づたいに南下してきた者など様々な経路をへて現在の北部タイに住みついたものである。この地域に住む諸民族は生活の場所と生業形態から3つのグループに分けることができる。すなわち、アカ族、リス族、メオ族、ヤオ族などのように1000m以上の高地に住み、焼畑耕作を主な生業としているグループ、タイ系の諸民族のように水田耕作を主とする平地民のグループ（この中にはカレン族の一部も含まれる）、さらに、焼畑耕作民と水田耕作民の両者の中間的位置をしめる山麓、丘陵地帯の中間ゾーンに住むカレン族を代表とするグループに分けられる。これらの少数民族の中にはタイ国を含むアジア諸民族の生活文化が大きく変貌しつつあるが、今なお、民族固有の伝統を継承し、独自の文化を守り続けている民族が少なくない。私たちは、1980年から北部タイの Chiang Mai, Chiang Rai 郊外の山岳地帯を中心にそこに住む少数民族の衣生活に重点をおいて現地調査を行ってきた。その結果については名古屋女子大学紀要第27号から第34号にアカ族、メオ族、ヤオ族、リス族、ラフ族について報告したが、今回はタイ北部の少数民族の中では人口的に最も多く、移動経路や名称が各集団によって異なり大変複雑なカレン族の生活習俗と衣裳について考察を行ったのでそれについて報告する。

方法及び資料

1. 現地調査……1980年～1988年にかけて4回北部タイの Chiang Mai 北の Chiang Dao の村と Chiang Rai からメコン川をさかのぼった Ruan Nit 村を訪れ聴き取り、観察、写真撮影を行った。
2. 資料……①現地で入手した衣裳、リトルワールド所蔵の衣裳及びカノミタカコ女史所有の衣裳の採寸、観察。
②チェンマイ大学山岳民族研究所、国立民族学博物館、京都大学東南アジア研究センターより得られた資料及び文献等を総合して考察を行った。

結果及び考察

1. カレン族の概要

北部タイに住む少数民族は言語の面から大きく二つの系統に分けられる。その1つはシナ・チベット語系でアカ族、ラフ族、リス族、メオ族、ヤオ族等がそれに属し、他の1つはアウストロアジア語系でラワ族がそのグループに入る。カレン族はシナ・チベット語系のカレン語群派に属する。

北部タイは南北に海拔2500mに及ぶ山脈が走っているが、その山中を中心に少数民族が住んでいる。それらの少数民族の多くは1000~1500mの北部高原地帯に主として住んでいるが、カレン族は他の民族に比べて一般に低く、山地との中間地域を中心に住んでいる。

戸籍を持たない山地民族の人口を数値で表現することは難しいが、Paul Lewis氏¹⁰⁾(1984)によれば、タイ国の少数民族は41万6千人でその中24万6千人がカレン族であると推定されており、タイ国における少数民族の中では最大の民族集団である。さらにビルマには東側の国境付近で一州を形成してカレン国家独立の旗上げの機会をうかがっているといわれるが、古い時代から独立運動をおこしたり多くの問題をかかえながら今日に至っている民族である。しかし、タイのカレン族はこれらの問題とは無関係な生活をしており、北西地域の森林地帯を中心に Mae Hong Son, Tak, Kanchana Buri などの州に多く住んでいるが、Chiang Rai, Lam Pooh, Lam Pang, Chiang Mai あたりにも広く分布している。

カレン族は同一種族であってもその住む地域や村々により生活や習俗が大変異なっており、種族の中も Skaw カレン, P'wo カレン, Taungthu カレン, B'ghwe カレン⁸⁾等いくつかに分けられ、その分類も研究者により一様ではない。タイに住むカレン族は Skaw カレン族が最も多く、61%を占め、残りの38%が P'wo カレン族で、その他のカレン族はわずかである。またカレン族は、飯島茂氏、白鳥芳郎氏、板橋作美氏、内田り子等諸氏により山地カレン族と平地カレン族、赤カレン族と白カレン族等というような分け方もされている。いずれもそれらは居住地域や移動経路等に基づいて分けられたもので、後者には両カレン族が住んでいる。なお、Skaw カレン族は山地に住んでいるグループもあるが、P'wo カレン族もかつては山地に住んでいたが Skaw カレン族に追われ次第に平地に住むようになったといわれている。カレン族の原郷は中国南西部、またはチベットの南東部にあったという説と、チベットのゴビ砂漠あたりが起源ではなかろうかという説とがあるが、現在ではその地域にカレン族の住んでいる形跡はなくはっきりしない点である。彼らはかなり古い時代からインドシナ半島を南下し、そこからビルマへかけての照葉樹林地帯に移り、さらにビルマからサルウィン川を渡ってタイへ移動を始めたのは18世紀頃であると伝えられている。彼らは18世紀後半から19世紀始めにかけてのビルマ軍とタイ軍の勢力争いにしばしば巻き込まれてきたため、平和な暮らしを求めて広大な未踏の地を求めながら北部タイにまで移動してきた。その頃はこのあたりにはラワ族が住んでおり、ラワ族と隣りあって住んでいたが、次第にカレン族が勢力をもちその地域一帯を占領するようになり、ラワ族を締め出す結果となって現在ではタイに住むラワ族はわずかである。なお、Taungthu, B'ghwe の両部族についてはわずかであるため省いた。

2. 生活と習俗

1. 信仰と儀礼

(1) 信仰

東南アジアには一般にアニミズムと呼ばれる精霊信仰が広く分布している。これは山、川、

草、木をはじめ自然界のあらゆるものに精霊が宿っており、人間のいとなみのすべてを支配し影響を与えているものと信じられているもので、カレン族も他の山地民族と同様、信仰神はアニミズムである。これはカレン族の社会文化に深く根差し、仏教やキリスト教のような一神教が侵入してきてもそれは払拭されることはなかった。しかし、仏教やキリスト教が彼らの信仰に全く影響を与えなかったというわけではなく、地域によっては仏教が入り、また19世紀の末頃からビルマからの宣教師によるキリスト教の布教は特別なカレン族社会を構成させ、これに属するカレン族の村は大きく変化したことも確かである¹⁾。また、タイとビルマの低地に住むカレン族にはかなり多くの仏教崇拝の習慣もみられるが、これは精霊信仰との折衷主義がとられており、大変興味深い現象である。一般には彼らの生活は仏教のような組織宗教は定着しておらず、アニミズムにおける神々は彼らの心の中にいつも生き続けているわけである。このアニミズムの中でもきわめて重要な意味をもち、カレン族の生活文化の中で中心的役割を果たしているのが、宗教儀礼と農耕儀礼である。それについてはタイ西北部地方を中心に調査された飯島茂氏の著書「カレン族の社会、文化変容¹⁾」及び、Paul and Elaine Lewis : People of the Golden Triangle¹⁰⁾に詳細に述べられているのでその中から主要な点を引用させていただいた。

(2) 儀 礼

1) 宗教儀礼

家族と村落という社会的基礎集団の秩序維持のうえで儀礼がどのように行われているかを飯島氏の著書から引用してみると、カレン族の社会文化において家族の占める比重は大きいですが、その家族の秩序を維持しているものは家神 Bgha である。これに対する儀礼を滞りなくすれば Bgha は家族の偉大な味方として保護に当たってくれると信じられている。しかし、それを疎かにした場合は病気や災害がもたらされるという。その儀礼を Oxe 儀礼というが、この Oxe には大きく分けると Skaw カレン族の Oxechuko の儀礼と、もう1つはそれによく似た P'wo カレン族の Oxe P'go 儀礼の2つの種類がある。Skaw カレン族の行う Oxechuko 儀礼と P'wo カレン族の行う Oxe P'go 儀礼を比較してみると、Skaw カレン族の場合は、遠くに離れて生活していても必ず母系親族集団が全員揃わなければ祭事は成立しないとか、司祭役はその親族の最年長の祖母あるいは主婦でなければならず、該当する女性がいない時には儀礼は成立しないなど、どちらかと言えば Skaw カレン族の Oxechuko 儀礼の方が厳格で Oxe P'go 儀礼の方がその規則がゆるやかである。いずれにせよこれらの家族単位の集団の儀礼を行うことがカレン族の生活を支えるよりどころである。

2) 農耕儀礼

カレン族の社会文化の中で重要な役割を果たしているものの1つに農耕儀礼がある。彼らは数々の農耕儀礼を行い農作祈願をしているのである。山地カレン族と平地カレン族の農耕に関する儀礼を整理すると表1のようになる。この表に見られるように、それぞれカレン族は自然の神に感謝や祈りをこめて儀礼を行い、この儀礼を行うことで食物に困ることなく暮らせると信じている。平地カレン族の儀礼には村ごとの違い、タイ族など平地民族との交流による違いなどがみられる。

2. 食生活

カレン族の食生活について、平地カレン族、山地カレン族のそれぞれを比較しながら特徴をあげてみると、平地カレン族の生活の中心は水田稲作である。彼らの水稲づくりは50~60年くらい前から始まったもので、タイ系の水田農耕民から技術を学び、かなりの苦労を重ねながらも村に水田稲作を導入したものである。これに対して山地カレン族は他の少数民族と同様に自

表1 農耕に関する儀礼 (平地カレン, 山地カレン)

平地カレン族 (水田農業に関する儀礼)	山地カレン族 (焼畑農業に関する儀礼)
<p>〈5月中旬～6月中旬〉</p> <p>LuHtiBoko儀礼 水田に灌漑水を導入する時に行うもので、水神Htikchaに捧げる儀礼</p> <p>Puchoda儀礼 水田の神Tok'cha Dek'chaに捧げるもので水田で働く人と水牛の平安を祈りまた充分水に恵まれるように祈る儀礼</p>	<p>〈4月中旬～5月中旬〉</p> <p>Pahmeko儀礼 山焼きを終え陸稲の種子を蒔く時行う儀礼</p> <p>Boaxu儀礼 播種を終え発芽する稲の成育を祈って稲魂Buk'laに対して行う儀礼 更に7月中旬～8月中旬に再び行う</p>
<p>〈7月中旬～9月中旬〉</p> <p>Boach儀礼 田植えの前と後に行う儀礼で地の神Hokok'chaに捧げる儀礼</p>	
<p>〈10月中旬～11月中旬〉</p> <p>OBuko儀礼 水稻の刈り取り開始寸前に行う稲魂Buk'laに捧げる儀礼</p> <p>PobuK'laの儀礼 脱穀時に行う儀礼</p> <p>Boabu儀礼 脱穀が終わった時、地の神Hokuke'haに実りの秋を感謝して行う儀礼</p>	<p>〈10月中旬～11月中旬〉</p> <p>Pachotah-Pobu儀礼 収穫儀礼で、水と大地の神に捧げる儀礼</p>
<p>〈12月中旬～1月中旬〉</p> <p>Talé Koti儀礼 カレン族特有のもので、水稻のもみを穀倉に入れた直後に行う大地と水の神に捧げる儀礼</p> <p>Sebuko儀礼 新米のもみを穀倉に入れて1ヵ月目にそれを取り出す時戸別に行う儀礼</p>	<p>〈11月中旬～12月中旬〉</p> <p>Obuko儀礼 脱穀が終了した次の日に行う儀礼で収穫を稲魂に感謝するため行う</p> <p>Sepoko儀礼 もみを自分の家の穀倉に入れる前に戸別に行う儀礼</p>

給自足で焼畑農業が主である。山地民族の焼畑農業では主に陸稲、副食ではさつまいも、バナナ、ココナツ、こしょう、大豆、ピーナツ、さとうきび、タバコなどを中心で作っている。彼らは焼畑農業に従事する中で数年に1度は移動し、肥沃な土地へと移り住んでいるが、平地カレン族は水田稲作による生活のため、その土地に定住した生活であり、ほとんど移動はしなくなっている。このように平地カレン族と山地カレン族とでは食糧をつくる手段の違いから以前は後述する住生活にも大きな違いがみられた。この他カレン族の重要な食糧として家畜と家禽があげられる。水牛、豚、鶏などを飼っており、特に豚や鶏は宗教儀礼の生けにえに用いるためには欠かせないものである。その他の食糧として山地カレン族では魚、昆虫をはじめ亀やトカゲの肉など食べられるものは何でも食べるようである。

次に平地カレン族と山地カレン族の食習慣の違いの主なものをあげると、平地カレン族は市場経済の影響を受け酒類は主に購入し、もち米を主食とするなどタイ北部の平地民の食生活や習慣が少しずつ浸透してきている。山地カレン族はうるち米が主食で、酒は自家醸造など平地カレン族と山地カレン族の食生活は異なる点が多い。以上カレン族の食生活の概要について触れたが、共通する点はいずれも米類を主食とし、日常は野菜、果物、魚類を副食としているが、

儀礼には精霊にささげた豚や鶏などの肉類を食べる。儀礼の回数が多いため動物性蛋白質が不足することはないようである。

3. 住生活

カレン族の住生活は彼らの家族制度と密接な関係がある。すなわち、カレン族の家族は理想的には妻方居住型であるため、男性は結婚すると妻の家、あるいはその家のある村に住むことが多い。一家族の構成は7～8人くらいからなり夫婦を中心とする未婚の子供たちによって構成されている。後継者は多くはその家の末娘が両親の家に残り老後の世話をするのが慣習となっている。これは末の娘は通常上の兄姉よりも結婚するのが遅いため、上の兄姉が結婚した後も両親のもとで生活し、結婚後はそのまま両親の世話をするという合理的なものである。このような家族形態の中で彼らの住居生活はどのように変遷してきたのであろうか。山地カレン族は、今世紀の初期頃まではロングハウスと呼ばれるアパートメントハウスのような家屋に住んでいた。材料は竹で、高床式に建てられた家屋で20～30家族が一緒に住んでいた。しかし、このロングハウスも時代と共に姿を消し、今ではほとんどみられなくなっている。ロングハウスはきわめて血縁性の強い集団によって形成され、焼畑農業に従事する中で何年かに一度は移住をしなければならない共同作業をする彼らにとって、ロングハウスは村落の成員全体で移動するという漂泊的生活様式をとっているものには都合のよい住居形態であった。それが時代と共に姿を消していったのは、一つには人口増加やそれに伴う土地不足によって焼畑農業による移動性が低下してきたためロングハウスによる成員全体での協力的移動の必要性がうすれたためといわれている。現在でも山地カレン族の人々は焼畑農業に従事しているが、以前のように土地を求めて、度々移住していく生活から焼畑に適した土地に出作り小屋を建て、村人はそこまで通い、そこを拠点として農業を行い、収穫した作物を持って帰るという生活に変わってきていること。もう一つは昔、ビルマ軍とタイ軍の争いや盗賊による治安が不安定なためロングハウスによって集団で自己防衛をしていたが、治安の安定に伴いその必要性が薄れていったことによるものといわれる。

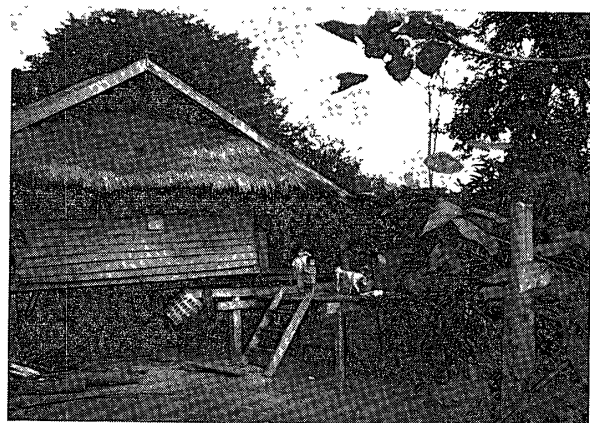


図1 カレン族の住居（Ruan Nit村）

平地カレン族の住居は村を形成した時から一戸建ての独立した家屋であり、図1で示すような高床形式で屋根はチークの葉や草葺きであるが、我々の訪れた村にはトタン葺きの家もみられた。高床式の家は乾季の暑熱を避けることができ、また、床下は涼しく主婦や娘はここで機織りをしたり農作業をしたりするほか、夜には家畜の寝場所にもなっている。これに対し山地カレン族の現在の住形態は、壁や床は竹で屋根は草葺きが多く、一戸建ての高床式であるが、屋内は大きな部屋が一間しかなく、平地カ

レン族の住居に比べれば粗末な住まいである。

4. 結婚

カレン族の社会では、どのような場合でも若い男女が二人で密かに会うのはタブーとされている。若い男女が知り合う機会は、結婚式や葬儀の場合、近隣の村から多くの人が集まったり、また、収穫の作業の手伝いがある機会である。しかし、若い娘はつつしみ深くしつけられ、男

性の興味を引くような行動は許されない。特に結婚の相手以外の婚外交渉や姦通は厳禁で、これを犯したものはその両人のみではなく家族全員が村から追放されてしまうしきたりである。婚約が成立すると結婚式を行う日取りが取り決められるのであるが、平地カレン族の場合は占いによって吉日を決め、山地カレン族の場合は当人たちの便宜によって日が決定される。結婚式そのものは平地カレン族と山地カレン族に大きな違いはないが、普通平地カレン族の結婚式は2～3日、山地カレン族の場合は4日くらいとやや長い。山地民族には年令を数えることは習慣としてあまりないが、他の少数民族に比べ、比較的結婚適齢期は高く18才くらいで結婚するのが普通のようなのである。カレン族は母系制社会で、妻方居住型の住居形式であるため新婦の家で結婚式を行う。カレン族の結婚式の特徴の一つは花嫁の着替えが式の中で行われることである。結婚式に限らず儀式ではその衣裳は重要な意味を持つものであるが、結婚式においては特に花嫁の衣裳は大きなポイントとなる。日本の場合、花嫁は純潔、清純さを象徴する白の衣裳を着て式に望むが、カレン族も未婚女性の着る白色のワンピース（フセ）で式に望み、途中でその白いワンピースを脱ぎ、既婚女性用の色ものの上衣と横縞のパシン式のスカート（二）の二部形式に着替え結婚が成立し、花嫁は妻となるのである。カレン族の結婚式は新婦の着替えをもって終わるがこれは P'wo, Skaw 同じである。この結婚式の中での新婦の着替えを見るとカレン族の衣服と生活習慣に深い結びつきを感じ、彼らの衣服に対する民族思想の一端を理解できるようである。

3. 衣生活

民族服飾は、その民族のとりまく気候風土や自然環境及び宗教、習慣など様々な条件の中で独自の形ができ定着したものである。それが最近では近代化の波にのり地域の特色が失われて画一化され、民族の文化的特徴が各面において失われつつある。そんな中であってカレン族の衣服は男性、女性、子供共に貫頭型の衣裳を着用している。他にこの北部タイで貫頭型を着用しているのはラワ族である。貫頭衣は衣服形態の原初的な型であるが、鳥越氏⁴⁾が歴史的な根拠に基づいて解析した結果によると、「日本人は古くは倭人と呼ばれていたが、その日本人と祖先を同じくし、文化的特性を共有する人々を倭族の名のもとにみると貫頭型を着用していた」ということである。また次に「倭族の貫頭衣は小幅に織った布2枚を縫い合わせ、頭を入れる、中央部を縫わないで縦に割れ目ができる形態である。そのためその後の衣服もすべて直線裁ちを特徴としている」とある。しかし、カレン族は先にも触れたように言語で分類すると、石井米雄氏⁵⁾はじめ多くの言語研究者はシナ・チベット語族に分類しているが、鳥越氏は衣服形態の上からみるとワ族、ラワ族等と同じモンクメール語（アウストロアジア語）族に入れるべきであるとしている。この衣服の面からと言語の面からの相違をどう考えればよいか今後の課題である。

山地民族の多くは男性と女性の衣服形態は異なり、子供服は大人の小型化したものが基本であるが、カレン族の場合は男女共基本的には貫頭衣である。男性は腰丈までの貫頭型の上衣にズボン、女性はタイ族と同型の筒型スカートである。しかしカレン族の女性の衣裳には既婚と未婚の区別があり、未婚女性は貫頭衣のワンピース形式である。同系の民族であるとみられているラワ族の女性の衣裳は既婚、未婚の区別がなく、装飾も少ない白地の素朴な衣裳であるが、二部形式の貫頭衣であり、そんな面からラワ族と同種族系の民族であるとされているものと思われる。

(1) 男性の衣裳 (図2)

カレン族の男性の上衣は既婚女性の上衣と同型の貫頭衣の衣裳に下衣は図3のようなズボン

をはいているが、以前にはサロン風のスカートをはいていたということである。これはビルマからの移動でビルマのロンジーをはいていたのではないかと考えられる。そのズボンの形態は倭人の特徴である平面裁ちであるが、現在では西洋式のズボンをはいている人が若い人の中で増してきている。今日の男性の衣裳形態は腰丈までであり、しかも P'wo カレン族, Skaw カレン族の部族間では顕著な差はみられないが、以前にはポーカレン族の中にはひざ丈までの上衣を着用する者もいたようである。また、P'wo カレン族の未婚男性は髪を長くし、一方の耳の所でひきつけて束ねているものもある。しかし、それもだんだん少なくなる傾向にある。男性は儀礼などの特別な時には赤いターバンを巻くが、現在では青年を過ぎると多くが角刈りにする者が多いようである。なお衣裳の色、柄は赤地に白のタテ縞の入った織物が多いが、縞幅は広いもの狭いもの様々である。

(2) 女性の衣裳

1) 未婚女性 (図4-右)

カレン族には少数民族には珍しく女性の衣裳に未婚と既婚の区別がある。山地民族にはそれぞれ固有の手芸的なテクニックが用いられているが、カレン族の未婚女性の場合は白のワンピース式の貫頭衣で、多くが肩や裾の部分に主に赤色の糸を織り込んだ縞の織物の衣裳である。

Skaw カレン族の場合は極めてシンプルな貫頭衣のワンピースで色は生なりの白で、腰あるいはやや上に赤の縞が織り込まれており、首、袖口の明きのまわりを赤色の糸で五つ組みで編んだものをコーチングステッチで止め、その端糸は房にして下げている。その貫頭衣はワンピース丈の2倍の布2枚を和服のように肩をわにして折り、中央を接ぎ合わせて首明き部分を縫い残し、脇を接ぎ合わせて仕立てる (図3)。したがって、着用すると前後Vの明きになる。その接ぎ方は裏側から0.2くらいの縫い代で細かく巻き縫いし、表からは装飾的にXのステッチがしてある。

P'wo カレン族も生地や仕立ては Skaw カレン族と変わらないが、より手をかけ装飾が多い。その装飾は幅広いヨークとひざ下あたりから裾に赤色で市松の織り込み模様の添毛織がされ (図5-右)、ヨークのところからは中の生地が見えない程の赤糸の房が縄のれんのように下がっている衣裳もみられる。Skaw カレン族に似たシンプルな衣裳と思われるものでも裾に菱形や網代、縞などの模様が織り込まれている (図5)。しかし、両カレン族とも未婚女性の場合すべて模様の基本の色は赤で、生地は白である。彼女たちは10才頃には自分の衣裳は作れるようになるが、それは年令と共に上達し、結婚する頃には凝った技術の織物などもできるようになる。これは自給自足の生活をする人々にとって女性は家族の衣生活を司るため、結婚の重要な条件となり少女たちは一生懸命それを学ぶ。

カレン族には入墨をしているものが目立つが、入墨の目的には護符・呪術・念願・結盟・標識・示威などいろいろあるが、この習慣は男性は勇気や力強さなどのシンボルとして入れている



図2 男性の衣裳

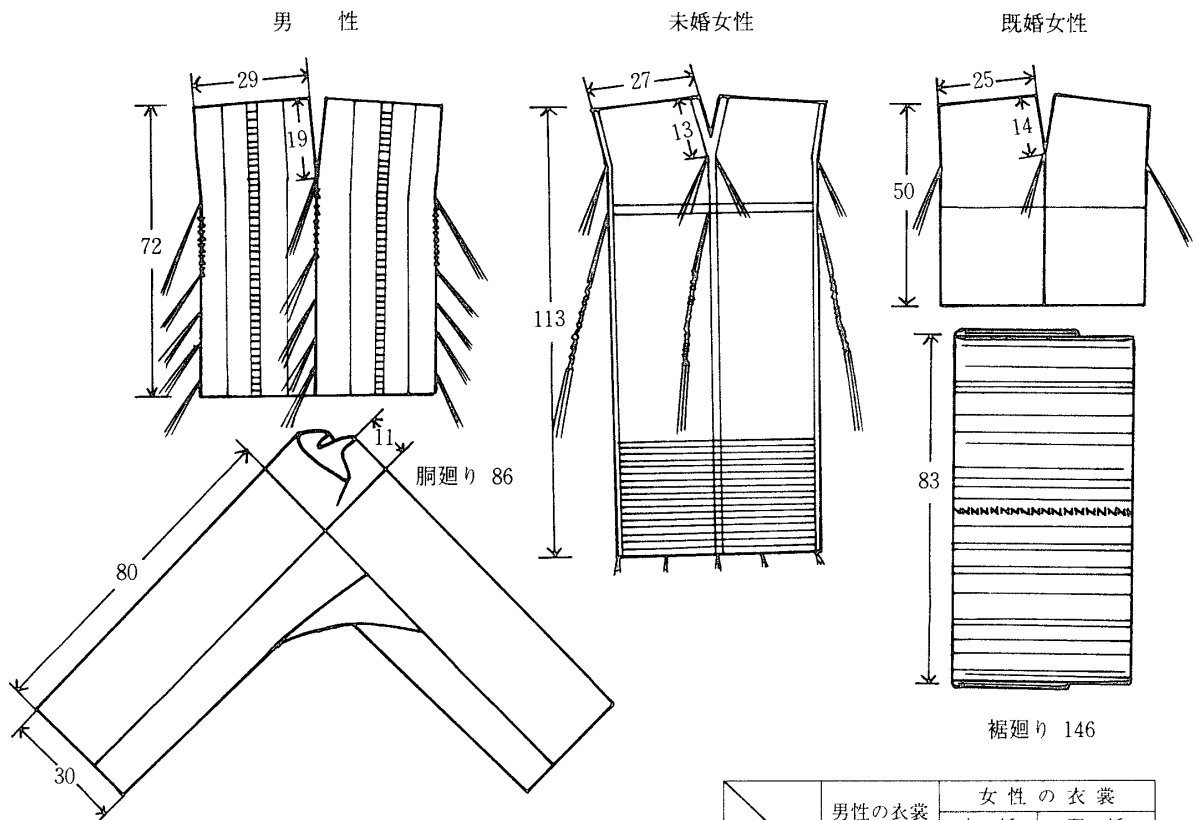


図3 カレン族の衣裳 (単位cm)

	男性の衣裳		女性の衣裳			
	上衣	ズボン	ワンピース	上衣	スカート	
密度	タテ	24	10	20	18	9
(本/cm)	ヨコ	26	18	11	11	10
厚さ(mm)		0.44	1.05	0.69	0.76	0.97
重さ(g)		190	380	320	200	360

るものであり、女性は腕の内側や手の甲などに小さな花びらなどの入墨をしているが、これは手仕事が上手になる様にといい願いをこめてするものである。入墨の習慣は黄色人種に多く、インドネシア、ポリネシアや北アフリカ、南北アメリカなどの原住民にもみられるようである。タイの少数民族ではラフ族、ラワ族にもその習慣があるといわれるが、我々の現在までの調査ではその習慣はまだみられない。しかし、女性の衣裳に未婚、既婚の区別はないので、これはカレン族のみが持つ特異質な文化ではなからうか。

色は人間の心理的連想に大きな意味をもつものであるが、一般的にいわれている色のシンボルからみると白は神聖、漂白、素朴、信仰等を表すが、カレン族の未婚女性の白のドレスは処女性のシンボルとして一般に意義づけられており、今でもそれは守られている。その他にまだ一人前ではなく未熟で手の込んだ衣裳まではまだ作れないということをも自覚させるためや、その他いろいろな面でのしつけ教育をも含んでのことであるが、それが純潔の象徴であることのみがとりあげられているようである。

2) 既婚女性 (図4-左)

既婚女性の衣服は上衣と下衣の二部形式である。衣裳のデザインは Skaw, P'wo により、また山地カレン、平地カレン、あるいはいつビルマから移動してきたか、またタイに移動する前に住んでいた地域など種々の環境条件等により多種多様で女性の衣裳のみで種族を分類することは難しく、形態も皆同じである。その形は貫頭型の腰丈までの上衣と筒状の横縞模様の長いスカートをはいている (図3)。山地と平地という居住地域による分類よりも Skaw カレ

ン族とP'wo カレン族の部族による分類の方が特徴がみられるためそれによって整理する。

Skaw カレン族の女性は綿を紡いで織り、藍染をした上衣である。装飾は上衣の裾から1/3~2/3あたりまで大変手の込んだ刺しゅうや簡単な刺しゅうのものなど様々である。首と袖口のまわりには未婚女性と同様赤の糸で五つ編あるいは七つ編をしたブレードを縁どりにしてコーチングステッチで止め、その先は房飾りにしてある。また少数民族はどの種族も装飾にはそれぞれ特有のものを先祖から受けつぎ未だに守られているが、カレン族にはヤオ族、メオ族、その他北部タイに住んでいる他の少数民族では見られないジョブの泪と呼ばれる禾木科の(一年草木)数珠玉の米粒に似た形の種がその刺しゅうの上にはほんの少しであるがビーズ刺しゅうの様につけてあるもの、またその種が装飾の重要な部分になるものなど様々であるが、ジョブの泪はカレン族の特徴である。それは人によって思い思いのデザインを刺しゅうと組み合わせて

独創的な工夫がされた図案である。代表的なものをあげてみると図6-右の様である。刺しゅうのステッチの種類は主にサテンステッチ、チェンステッチ、アウトラインステッチでよりの甘い木綿糸が用いられている。スカートはカレン族特有の赤サビ色のピトンスキン(ニシキヘビの皮)という横縞の柄であるが、これはカレン族の大昔の民話につながるものでいわば伝統的な柄であるといえよう。仕立ては二枚の布を横に接ぎスカート丈にしてそれを筒に縫ったものであるが、タイ族のようにゆったりした裾幅はなく、前で一本プリーツにたたんで紐や銀のベルトで締めている。スカート丈は膝から下は自由で仕事などにより加減してはいているようである。この衣裳の染料はKhoという草の根をつぶしたものである⁹⁾。



図4 既婚・未婚女性の衣裳

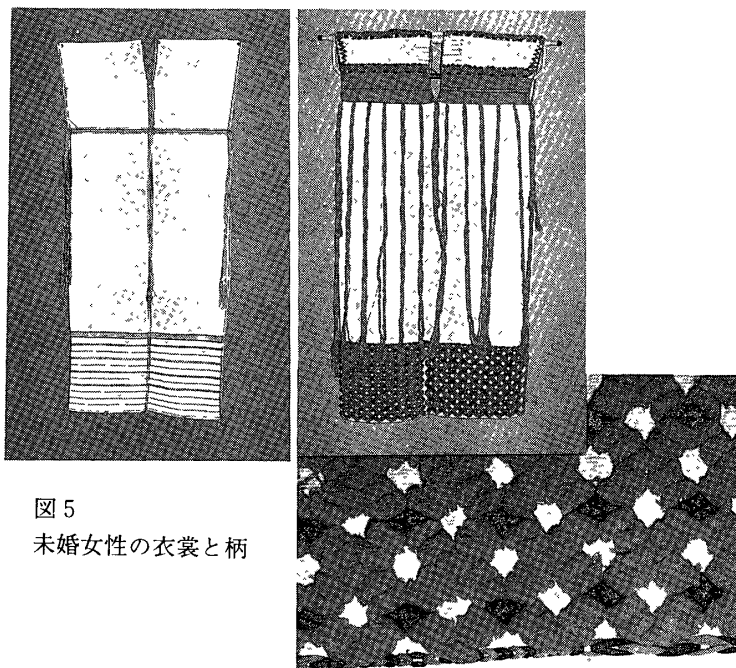


図5
未婚女性の衣裳と柄

9)

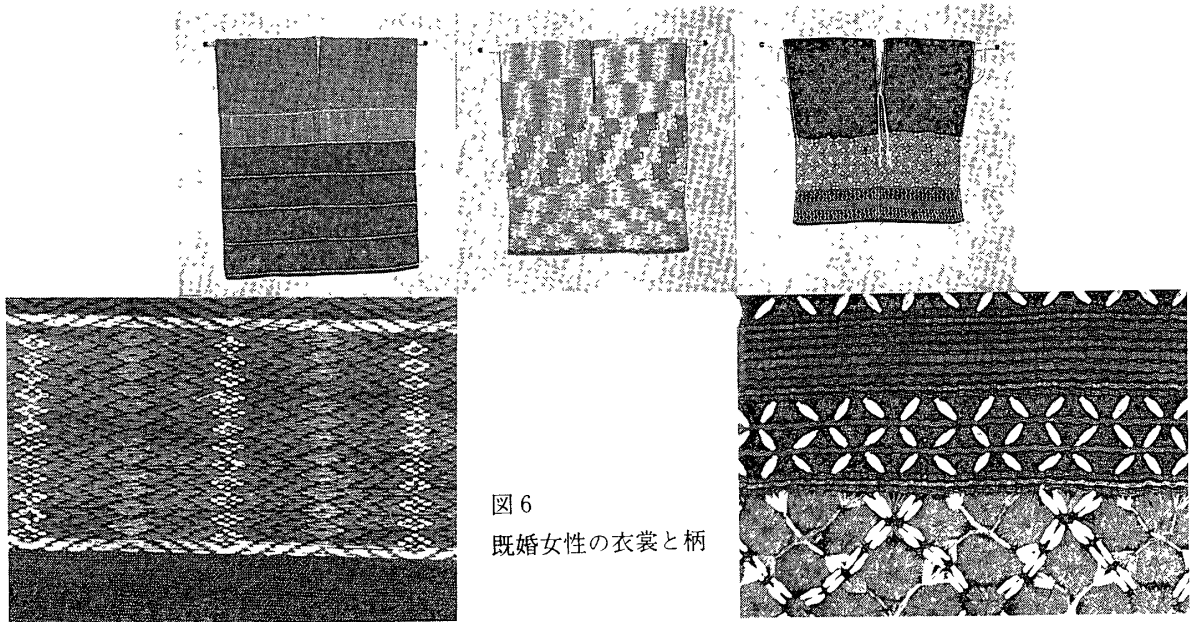


図6
既婚女性の衣裳と柄

P'wo カレン族の既婚女性は一般的に Skaw カレン族より手の込んだ衣裳を着ている。Skaw カレン族と同じように刺しゅうやジョブの泪という種を用いたものもあるが、P'wo カレン族独自の錦織に似た織り込み模様がみられ、それには毛糸などが横糸に用いられボリューム感のある衣裳である (図6-中)。更にもう一つの特色としては Skaw カレン族では数少ない柄の位置である。肩から上半身よりに模様がおかれている衣裳がみられる (図6-左)。スカートは Skaw カレン族と同様で特に顕著な違いはみられない。以上カレン族の衣裳はいずれもジョブの泪という種を用い、装飾用糸には赤を基本に用いた貫頭衣を着るが、P'wo カレン族と Skaw カレン族を衣裳の面から分類することは大変難しい。しかし、両者を比較した場合 P'wo カレン族の方が全般に刺しゅうなども手の込んだ衣裳であり、織り込み模様の衣裳もみられボリューム感のあるものが多い。脚絆は両者ともはいている。

(3) 機織 (図7)

カレン族の衣服は木綿であるが、それは自家栽培による綿から紡ぎ、染め、織りと自給自足のものである。彼らの布にする工程を図にしてみると、まず最初に綿の種を取り除く綿くりの作業 (7-1) から始まり、次に綿打ちをする (7-2)。これは繊維をほぐす作業で種を除いた綿に弓を打つのである。ほぐした綿は細い棒に巻きつけ、しら巻きを作る。これは日本においても明治の紡績業が発達するまでは各地で行われていた様である。次の作業は紡ぎ車で糸を紡ぐ仕事である (7-3)。紡いだ糸は染め、整経をする。それから機織の仕業となる。機織は簡単な手織機である。機の形式は縦糸の置かれる状態により(1)堅機、(2)水平機、(3)傾斜(斜行)機に分類することができるが、カレン族の手機は(3)の傾斜機に含まれる。すなわち、傾斜機というのは樹木、柱などに経糸を固定し、布巻きは織手の腰で保持され地面に座っていきながら織る後帯機といわれる機織である (7-4)。前田亮氏によるとこの織機は照葉樹林帯文化圏の北の縁に沿った稲作地域に限定されているもので、現在でも東南アジアの島々でも多く用いられている織機で、北部タイの山地民族では他にラワ族がこの機を使っている。そして彼らの衣裳も貫頭衣であるということは、カレン族がタイへ移動してきた時にラワ族がその地域に住んでおり、隣あって住んでいたこともある様でそのあたりの交流とかかわりがあるのではないかと大変興味深い問題である。



7-1 綿くり



7-2 綿打ち



7-3 糸紡ぎ



7-4 傾斜機

図7 機 織

要 約

1. 東南アジア大陸部の一角，北部タイにはそれぞれ特有の生活文化をもつ幾種類もの少数民族が住んでいる．このうち最も多くの人口を有し，使用言語上から一般にシナ・チベット語族に分類されているカレン族について調査した．この民族は住む地域や移動経路等により一様ではなく，大変複雑な歴史や生活習俗をもつ民族である．
2. カレン族も他の少数民族と同様アニミズムと呼ばれる自然崇拝の信仰が基本であるが，最近では地域によりキリスト教や仏教なども布教し，カレン族の社会や文化に影響を与えている．しかし，根底にはアニミズムの精神が定着しており，折衷主義もとられている．信仰に関する儀礼には基礎集団の秩序に関係する宗教儀礼と経済生活に関連する農耕儀礼がみられる．
3. 食生活については主食は米で，平地カレン族は水田耕作によるもち米を，山地カレン族は焼畑耕作でとれるうるち米が主である．副食には野菜類の他，タンパク源としては家畜と家禽の他，動物で食べられるものは何でも食用とする．
4. 住生活は家族制度や農業形態と深い関係があり，山地カレン族は100年くらい前までは口

ングハウスに住み、血縁性の強い集団によって形成されていたが、現在では平地カレン族と同様、高床式で草葺きの住居である。家族制度は妻方居住型で末娘が後を継ぐ。

5. 衣裳は男女共に貫頭衣であるが、女性の衣裳には未婚・既婚者の区別がある。男性は腰丈までの貫頭衣にズボン、既婚女性の下衣はタイ族と同型の筒型スカートである。未婚女性は貫頭衣の白のワンピース型である。女性の衣裳の装飾の基本の色は赤で織物が多い。刺しゅうは既婚女性の上衣のみに用いられるが、その刺しゅうの他に、ジョブの泪というカレン族のみが用いる禾木科の数珠玉に似た種が刺しゅうと共に刺されているのが特色である。未婚女性は結婚すると衣裳が替わるが、それは結婚式の中で着替えられ、未婚女性と既婚女性の区別がここで明らかにされることになる。

文 献

- 1) 飯島 茂：カレン族の社会・文化変容，創文社（1971）
- 2) 飯島 茂：祖霊の世界，日本放送出版協会（1973）
- 3) 石井米雄：世界の民族，11，16，124～127，平凡社（1979）
- 4) 鳥越憲三郎：原弥生人の渡来，角川書店（1982）
- 5) カノミタカコ：タイの国より愛をこめて，染織と生活社（1982）
- 6) 石川栄吉他：文化人類学事典，178，333，474，弘文堂（1987）
- 7) 前田 亮：DESIGN OF LIFE 生活文化史，14，28～39，日本生活文化史学会（1988）
- 8) G. Young: *The Hill Tribes of Northern Thailand*, 74～82（1969）
- 9) J. S. Uberoi: *From The Hands of The Hills*（1981）
- 10) Paul and Elaine Lewis: *People of the Golden Triangle*, 68～99（1984）
- 11) Alan. R. Randall: *People of The Hills*, 179～199（1987）